

# 家畜の生と人間の身体

——土路草一「潰滅の前夜」「魔教圏No.8」論

河原梓水

※本稿には激しい女性虐待描写が含まれる。

【要旨】本稿では、一九五〇年代後半から一九六〇年代初頭にかけて、周縁的セクシュアリティを扱う読者投稿誌『奇譚クラブ』に生じた「家畜化小説」ブームを取り上げる。日本人の家畜化を、ほかならぬ日本人が欲望し描いた作品としては、沼正三「家畜人ヤプー」がよく知られている。しかし、実は「家畜人ヤプー」は後発作品であり、むしろ先行する家畜化小説に触発されて書かれたものである。本稿では、「家畜人ヤプー」に先行する家畜化小説である、土路草一の「潰滅の前夜」シリーズおよび「魔教圏No.8」を取り上げ、沼正三の家畜論も参照しながら、人間の身体を家畜の身体へと変化させることへの欲望、そして家畜の生が希望としても提示される事態を分析する。

【キーワード】奇譚クラブ 家畜化 動物論 沼正三 水爆

## 一 はじめに

一九五〇年代後半、読者投稿誌『奇譚クラブ』<sup>①</sup>に連載され、後年ベストセラーとなった沼正三（倉田卓次）<sup>②</sup>「家畜人ヤプー」が、白人による日本人の徹底的な家畜化を描いた小説であることはよく知られている。沼がマゾヒストと名乗っていたことから、この日本人家畜化への欲望は、日本人男性の敗戦のトラウマ、男性性の危機を反映したものとして理解されるのが常であった<sup>③</sup>。しかし、当時の『奇譚クラブ』には、実は沼が「家畜人ヤプー」（以下、「ヤプー」と表記）を執筆する契機となった、「ヤプー」に先行する家畜化小説があり、それは、サディスト男性による、女性の家畜化を描くサディズム小説<sup>④</sup>であった。そしてこの小説を起点として、「ヤプー」を含む複数の家畜化小説が書かれるようになり、家畜化小説ブームとでもいうべき状況が起こったのである。この事態を踏まえるならば、家畜化という欲望はマゾヒズム、そして沼正三という個人の特性のみに帰せられるべきものではなく、共通の基盤、時代性にもとづくと考えられる

きである。

したがって本稿では、「ヤブー」に先行する家畜化小説の書き手であり、「家畜化小説」というジャンルを成立させた作家、土路草一に着目する。土路が『奇譚クラブ』に発表した家畜化小説のうち、「潰滅の前夜」シリーズおよび「魔教團<sup>ネット</sup>」について、沼正三とも比較しながら検討する。これを通じて、人間の身体を家畜の身体へと変化させることへの欲望、そして家畜の生が救済として提示される事態を明らかにしたい。

## 二 土路草一の登場

土路草一は、突然『奇譚クラブ』に現れた、正体不明の投稿作家である。当時女性が男性名を使って書くことはまれであったため、おそらく男性とみなしてよいが、職業や年齢はわからない。ただし、戦中派の沼にかなり丁寧に応じているため、それほど年配とは思われず、沼と同世代もしくはさらに若い世代と推測される。一九五六年七月から一九六一年三月までの四年八カ月間、未完に終わったものも含めて四つの小説を『奇譚クラブ』に寄稿した（『潰滅の前夜』、『続・潰滅の前夜』、『魔教團』、『8』、『地霊の国』）。すべて家畜化小説であり、四作品とも、日本人と区別のつかないアジア人が日本に入り込み、主に女を誘拐し家畜化する過程を描いている。このような、日本のかつてのアジア支配を想起させる設定を踏まえれば、土路には大陸居住歴があるか、旧植民地出身者であった可能性がある。

彼の第一作『潰滅の前夜』は、かつて日本が「虐殺をほしい

ままにした「Y国」が、戦後立場を逆転させ、水爆を日本に打ち込み無力化した上で占領支配しようともくろむ、しかし、核で殲滅するには惜しいと判断された美貌の女だけがY国人によってあらかじめ捕獲され、東京の地下で家畜として飼いならされるという設定である。Y国人は流暢に東京弁を話し、日本人と全く見分けがつかないとされ、日本社会に溶け込み、女をさらうほか、様々な工作を行い内側から日本を破壊していく。

「潰滅の前夜」で描かれる家畜化は徹底したものであり、非常に激しい肉体的暴力描写を含む。このような暴力は、戦後の民主化に逆行するものとして『奇譚クラブ』でもそれほど好まれていなかった。にもかかわらず、本作はほとんど絶賛といえる評価を受けた。まず沼正三が一九五六年九月号に「家畜化小説の登場を喜ぶ」を寄稿し、「潰滅の前夜」は、日本人種<sup>種</sup>の完全な家畜化を描いた初の作品だとして絶賛した。さらに翌月の一〇月号には、肥満体を愛好するマゾヒスト、麻生和夫が「家畜化小説の登場を喜ぶ」に共鳴して「を発表、読者通信欄にも『潰滅の前夜』を称賛する声が、サディスト・マゾヒスト双方から寄せられ、誌上はにわかに家畜化小説に対して盛り上がりを見せ始める。そして一九五六年一二月号より、「家畜人ヤブー」と、真木不二夫（飯田豊一）の「黄色オラミ誕生」という、ふたつの日本人家畜化小説が、一九五七年六月号からは、佐川増夫による「L・T商会」がスタートする。このブームは類似誌『裏窓』にも波及し、いくつかの家畜化小説が掲載された。

「家畜化小説」とは沼の造語であり、家畜動物そのものに転身する小説のことではなく、さらには、家畜として扱われる人

間をただ描いた小説のことででもない。沼は、土路以前の「マゾヒズム小説」はどれも「女主人対奴隸」という類型（傍点は原文）を脱していない点に不満があったという。この類型は、「世間の無数の男女結合の中」の一对であり、私的関係に過ぎないから、「二人きりの時いくら犬や馬にしたとて」、女主人は奴隸が本当は人間であることを完全に忘れることができない。そのためこの類型の本質は「サド・マゾ・プレイを合意でやっているのと大差なく」、「何より嫌なのは、女の側に罪障感が免れ得ないこと」であるという。そして以下のように言う。

この罪障感を生ぜしめないためには男が本当の家畜になるしかありません。（中略）あの慎ましやかな「細雪」の雪子さえ兎の耳なら足の指でつまむのです。サド・マゾ・プレイの不純な遊戯感の家畜と飼主の間には生じようがないのです。家畜になりたい！

人間を奴隸視することの罪障感を取り除き、女性の品性と両立可能な形で、真の人格無視を可能にする方法が、相手から完全に家畜視されることなのである。しかし自分たちは人間の身体を持っているため、「馬や牛への転身空想では喰い足りぬ」。牛馬の身体では我が物としてリアルに空想することが難しいという意味だろう。したがって沼が求めるのは「人間家畜」、すなわち「人間の肉体を備えつつしかも家畜と同様に取り扱われる存在」であり、これを可能にする唯一の方法は、「制度として人間の家畜化が認められた社会」を想定することであるという。す

なわち、沼のいう家畜化小説とは、制度化された人間家畜の様相を描く小説のことであり、「潰滅の前夜」は「前夜」とはいえ、それを達成した初の作品であるという。

土路作品で家畜化されるのはほぼ女であるが、これは、土路が異性愛のサディストであり、彼の小説が基本的にはボルノ小説であることに起因すると考えられる。しかし、にもかかわらず、彼の作品は沼はじめ、様々なセクシュアリティの持ち主を魅了した。沼は、「関心圏を日本人全体にまで広げて」読むため、性別は大して邪魔にならないと述べている。このような受け止められ方は、土路作品が、単なる女性虐待ボルノにとどまらない奥行きを持っていたことを示すものである。

好意的な反響を受け、土路は一九五七年三月号より「続・潰滅の前夜」の連載を開始する（以下、正統を合わせて「潰滅の前夜」シリーズと呼称する）。本作にも熱烈な賞賛の声が読者通信欄に投稿された。例えば以下のようなものである。

圧巻は何といつても「潰滅の前夜」です。発刊を待ち焦がれ、そして入手と同時にこの作品の最後の「未完」の二字に、ほっと安堵するのは私だけでしょうか。（一九五七年七月号、一七三―一四）

読者通信の掲載方針は、様々な好みをなるべく偏らず掲載することであったため、特定の作品に言及が集中することは少ない。一号に二程度の言及があればその作品は十分に人気作と判断できる。しかし土路作には一号に四〜五の言及があり、圧

倒的な人気をうかがわせる。沼もしばしばおおむね絶賛である感想と要望（汚物描写を入れてほしい。男の家畜を登場させてほしい等）を述べており、土路は実際に男の家畜を登場させもしている。

しかし、土路の作品は、既述の通りどれも容赦ない徹底的な暴力行為を描いており、それは現代の目から見てかなり残酷なものである。読者をSM愛好者に限ったとしても、万人受けするとはとても思われない。にもかかわらず、読者に熱狂的に受け入れられ、次々と類似の小説を生み出していったのはなぜだろうか。この点を時代背景から検討した上で、土路作品が何を描いているのか、彼の家畜化小説には一体何が賭けられているのかを検討したい。

### 三 最初の家畜、最後の家畜

まず、『奇譚クラブ』において、家畜、および家畜化がどのようにに論じられていたのかを確認したい。

近年、動物論が様々な分野で盛んになっている。これらは動物と人間の境界の恣意性・政治性に着眼し、ある種の人間が時に動物とみなされ、そのことによって残酷に排除・殺害されてきたことを指摘・批判してきた。かかる議論では、人間の動物化という事態は、人間による動物への暴力が人間に転用されたものだとしばしばみなされている。例えばC・パターソンは、「最初に人間が動物を搾取し屠畜する。次に人間が他の人びとを動物のように扱い、動物に対するのと同じことをする」と述

べる。本稿に関わるものとして、戦後文学における動物の主題を検討した村上克尚もまた、「人間の人間に対する暴力の背景には、人間の動物に対する暴力が存在している」というJ・M・クツツエーの示唆を継承して論じている<sup>9)</sup>。

しかし、『奇譚クラブ』ではかかる前提に立たない見方が影響力を持っていた。すなわち、事態は逆であり、人間の人間に対する暴力こそが動物に転用されているという見方である。参照されたのはアドルフ・ヒトラー『メインカンフ研究』である<sup>10)</sup>。

沼は、一九五五年一月号掲載のエッセイ「最初に犂を引いたもの」において、『メインカンフ研究』からヒトラーの「最初の家畜」に対する見解を紹介している。いわく、先史時代、人間——もちろんこれはアリアン族のみを指す——が有色人種を「家畜化」した経験が、後に牛や馬の家畜化に活かされた。「被征服種族が奴隷として使役されてから後に始めて、同一の運命が動物の上にも降りか、り始めたのであって」、「決してその逆であったのではない」、「始めに先ずこの被征服者が犂を引いた」。労働力として有色人種が牛馬に及ばぬことは明らかだが、それでも馬が使用されるようになるまでの間、有色人種は犂を引いたのだという。沼は続けてヒトラーの言をまとめる。

かようにして有色人は人類（つまり白人）の「最初の家畜」となった。然しそれは有色人にとって幸福な運命だったであろう（そうヒトラーはいうのだ）。（中略）有色人達はアリアン族の家畜となったことを後悔せず、むしろ感謝したであろう。それは彼等にとつて「ヨリ良き運命」であった。

／かりに彼等が犁を引く重労働に苦しんだとしても、なお彼等は感謝すべきであった。なぜなら無意義に終るべかりし生を、(中略)アリアン族の文化建設に役立つことができ、有意義な生を送ることができたからだ(二〇一)

ヒトラーに従えば、動物ではなく有色人種こそが家畜の「原型」である。さらにこの家畜化は、有色人種にとって「ヨリ良き運命」であった。なぜなら、野生のままただ生きるだけの生は「無意義」であるが、家畜化され使役されることで、より高次な存在の「文化建設」に貢献することができるところである。

この「最初の家畜」説の真偽、そして家畜の運命への評価の是非はともかくとして、沼はこれを、「白人の物の考え方」としては理解できるとし、一九五四年に起きたビキニ事件に言及する。周知のとおり、マーシャル諸島のビキニ環礁において米国の水爆実験が行われ、ビキニの住民、日本の漁船第五福竜丸の乗組員を含む多くの人々が被曝した事件である。乗組員の「原爆症」発症、「死の灰」による食品汚染がセンセーショナルに報道され、日本はパニックに陥った。日本政府は米国に説明と補償を求めたが、米国はこれを相手にしなかった。

原爆は何故日本にだけ投下されたのか、ナパーム弾は何故朝鮮だけで使用されたのか。(中略)広島、長崎の原爆は日本人の数十万人にとって死の苦しみであった。然し数千人の米国兵士の生命はヨリ尊いが故に「その損耗を防ぐためには原爆使用は有用な措置であった」と大統領は言明して

いる。ビキニ環礁の原住民達は、墳墓の地を爆砕されて死の灰と化せしめて頭上から降り注がれることの苦しさを訴えた。まるで生地獄だ。だがストロウズ委員長は水爆は自由国家にとって有用であるからとの理由で、実験続行を言明した。水爆が必要である限り、そしてそんな生地獄が白人の国土に現出すべきでない限り、ビキニ環礁における実験は疑いもなく米国にとって有用であり、進んで彼等原住民の被爆症状データが後に白人達の治療にプラスする限り、原住民の苦しみが大きいほどますます、その生体実験は有用である。(二〇二)

沼は、原爆の投下、朝鮮戦争、そしてビキニ環礁での水爆実験は、いずれも白人が有色人種を家畜視しているからこそ行われたのであり、日本人は「人類」のための実験用家畜であるとする。沼は、そして、これらの出来事での米国の振る舞いを、ヒトラーの家畜観によって解釈する。沼にとって、米国とナチスの間にはいささかの違いもないのである。彼の解釈がそれほど突飛だったとは思われない。米国、ソ連、英国などが行った核実験は、多くの場合マーシャル諸島のような信託統治領や先住民の居住地で行われており、核実験の強行には明らかな人種差別思想があったことが指摘されている。

ヒトラーの見解は人類の「最初の家畜」に関するものではあるが、ビキニ事件を踏まえれば、「最後の家畜」も有色人であるうと沼は書いている。沼のこの文の末尾には、編集部によって別の読者からの、白人優位の心境を述べる投稿が挿入され

ており、沼の見解に対する肯定的姿勢がみえる。

沼はヒトラーの家畜観およびビキニ事件に見出した「苦しくはあるが」白人にとって「有用な」家畜の使用を、後に「ヤブー」の骨子として用いている。作中のヤブー、即ち日本人の利用方法は多種多様であり極めて残酷であるが、これらは全くの空想ではなく、多くが奴隷制に関する文献から着想を得たものである。つまり実際には、人間が人間に行った支配と暴力の技術を参照している。沼にとって家畜とは本質的には人間の種類なのであり、土路もこの考えに触れていたはずである。「魔教圏No.8」には、ヒトラーの主張が引用されもしている。この発想に立てば、歴史的に劣等人種に対して付与されてきた「獣性」、動物的とされる様々な存在形態は人間の本来の持ち物であることになる。以上を踏まえたうえで、土路作品の検討に入りたい。

#### 四 小説の構造

「潰滅の前夜」は『奇譚クラブ』一九五六年七月・八月号に掲載されたが、土路はこれを二年前の夏、即ち一九五四年の夏に執筆したと述べている。作中世界が、水爆による日本潰滅「前夜」とされていること、登場人物が囚われた女たちを救出しようとするその瞬間、日本への核ミサイルのスイッチが押されるところで物語が終わり、末尾に核戦争に対する警句が付されることなど、本作でもビキニ事件の影響を見ることはたやすく、水爆による日本の潰滅は、作中で重要な意味を持たされている。

加えて、作中で誘拐されるのは、きまって裕福な暮らしをし、

仕事を持つ「近代娘」・「ビジネス・ガール」である。ここには、家柄やコネクションによって戦後を生き延び、戦争特需で潤った日本経済を謳歌する女たちへの嫌悪がみられる。加えて、「潰滅の前夜」の主役・御法川伶子が働く会社は、「兵器を作る会社」で、「原子誘導機」を受注していると説明される。「タイピストの白い指先は（中略）、戦争を無意識に推進している。口々に平和を唱えながら……」と、地の文において批判的に語られる。「魔教圏No.8」の主役・比奈地路子は、化学工業の研究室に務めているが、この研究室ではICBMと人工衛星に用いる固体燃料の開発を行っている。

さらに、「潰滅の前夜」の副題は、「私は悪いことをしません」であるが、この台詞が作中で用いられるのは一度のみで、それは第一の犠牲者・多摩圭子が、Y国人の尋問中に発する言葉である。圭子は拷問にかけられ翻意し、「悪いこと」を告白しはじめるが、そのひとつはY国人を「ちんべろ」という蔑称で呼んだことであった。圭子は善良な女性として造形されているが、拷問されるまでこのことを「悪いこと」だと認識していない。このような意識すらされない差別意識、権力性が、土路作品では繰り返し指摘・糾弾される。家畜化された女たちの前には、本人の認識では「親切にしてあげた」はずの「愚鈍な」社員、雇い入れた女中などが、異人種の正体を現して登場し、彼女たちを容赦なく苛む。そして女たちの「親切」が目下の者を憐れむ傲慢さからきていることを糾弾し、女たちの方こそが下等な家畜であることを、苛烈な暴力で証明してみせる。このように、日本人のアジア人差別、さらに言えば家畜化が、因果応報として



私たちの身に襲い掛かっているのである。このように土路は一見すると、家畜化される女たちにはそれにふさわしい「罪」があると書いてある。

しかし、作品構造はそれほど単純ではない。なぜなら、本作は日本が水爆によって潰滅する「前夜」を描いているのであり、家畜化された女たちは、潰滅後生き延びる存在でもあるからだ。彼女たちは人間のままで水爆に焼かれるしかないが、家畜になることによって生を与えられる。その生がいかに苦しく、みじめなものであっても、家畜の生は救済として設定されているのである。この構造は続く「魔教圈No.8」でも変化していない。

一九五八年三月号から計一四回連載された「魔教圈No.8」は、「潰滅の前夜」シリーズを上回る傑作として絶賛された作品である。「続・潰滅の前夜」完結から半年、じつくりと練られたであろう本作は、ポルノ小説とは思えない壮大な構想のもと、日本人種ではなく人類全体の家畜化をなぞうとする架空の異人種・イータビー人を登場させている。彼らは中東の山岳地帯に住み、「黒天使」を信仰する人々であるが、彼らの外見・習慣は日本人と酷似しているという。その理由として、土路は「高天原民族」の中部アジア起源説を持ち出し、両者が実は共通の祖先から分かれたものだとし唆する。そして、イータビー人と日本人の違いは、「神を信じるか悪魔を仰ぐか」の違いだけだという。この神とはもちろん天皇を指すとみさせる。連載初回は、このイータビー人の起源神話と彼らの信仰の説明にかなりの紙幅が費やされる。

神話の内容はすなわち、人類の祖であるところのアダムとイヴが、彼らの子供の所有権を争い、各々の「生命液」を素焼き壺に封じて単性生殖を試みる。結果、イヴの素焼き壺の中には塵しか生じなかったが、アダムの素焼き壺のなかには、萎びてはいるが男の赤ん坊がいた。以後、イヴはアダムに屈し、その後は積極的に有性生殖をおこない、人類の祖を生み出していったという。しかしこのとき、アダムの素焼き壺の中にイヴとは無関係に生じた男児が、イータビー人の始祖であるという。

この神話はシーブルック『アラビア奥地行』所載のヤジディー人起源神話に基づくが、オリジナルの神話においては、アダムとイヴによる有性生殖によって誕生した者が人類の祖とされている。この点を踏まえれば、イータビー人がアダムの単性生殖によって生じた者を始祖とすることは、彼らが現存する人類とは起源を異にする人々であることを意味し、つまり土路は、彼らを人類の他者として登場させていることを意味する。事実、イータビー人は、彼らが仰ぐ「黒天使」を信仰しない人々を異教徒と呼ぶが、それは彼ら以外の全人類を指している。

重要なことは、イータビー人は、第二次世界大戦にも関与せず、原水爆の開発にも関わっていないと説明されることである。彼らは水爆を日本支配に用いるが、それを持ち込むのは「戦争商人」と呼ばれる白人種族・ユーマ人である。彼らは彼らの迷惑により、イータビー人に武器弾薬を供給するが、両者はそれほど良好な関係ではない。イータビー人は原水爆の開発競争を「異教徒」の「邪しまな争い」と呼び、近い将来核戦争によって滅びる人類が変わって、新たに地上を統治する存在として自

らを位置づける。つまり、イーダビー人は、原爆投下や水爆実験等によって発生した様々な悲劇に対して全く罪のない存在であり、核を用いざるを得ない人類を批判・断罪する正当な資格を持つ存在として設定されているのである。この罪なき他者は、しかしながら苛烈に人類を断罪し、楽しみながら家畜化する、邪悪な他者でもある。すなわち、既存の道徳を超越した神のような存在であって、そのためか、彼らの人間的な日常や社会はほとんど描かれることがない。

この点は「ヤプー」との大きな違いである。家畜とは、人間の實用に資する存在であり、通常では何らかの目的の為に飼養されているものである。したがって「ヤプー」では、舞台設定とともに、家畜・ヤプーの多種多様な用途がふんだんに提示される。しかし土路作品では、女たちに一体どのような実用性があるのかほとんど不明であり、出荷後の用途も、行き倒れの死体を回収し葬る墓堀り家畜であったりと、美しい女である必要が全くないものである。むしろ土路の関心は、家畜の受苦の詳細にあり、私見では、女たちが受苦を通じて成し遂げる、家畜の身体への「真の」転身にある。以下、作中における家畜化のプロセスに着目して検討してみたい。

## 五 家畜への道程

現代において女性家畜化のファンタジーは、性奴隷化と同義であることが多く、この場合家畜化とは徹底的な性的モノ化を意味している。しかし、土路作品における家畜化は決して性奴

隷化ではない。「潰滅の前夜」において家畜化の理由は、日本を潰滅させた後、進駐してくるY国兵士にあてがうためだと一応は説明される。しかしながら、作中で行われるのは性奴隷化には全く不要かつ過剰な肉体的虐待のみである。女たちは人間とは別種の卑しい動物として扱われ、一般的な意味での性的魅力ははつきりと否定されていく。もちろん、「獣姦」として性的凌辱を描くこともできたはずであるが、土路にはその気が全くない<sup>15)</sup>。土路が描くのは、男女双方にとって明確に苦痛であるだろう身体の酷使であり、それは例えば、何十時間も休みなく走らせる・重い荷物を牽かせる・乗せる、睡眠・水分・食糧を制限する、といったものである。その際に女たちから絞り出される悲鳴は、「ああお！あああ！」「ぎゃお！」といったおよそ女性らしくない「獣の唸り」として表現される。

この傾向は「魔教圏No.8」でより顕著となる。本作では、私たちの美貌を、家畜としての美しさ・良質性と連続させることで、彼女たちのエロスを防いでいる。作中で最も美しいと設定されている路子は、調教師に家畜としての価値を値踏みされる際、豊かな胸や白い肌、ボディラインを「逸品」と評価される。しかしその際には「皮膚質」「肉質」といった表現が用いられ、性的魅力として評価しているのではないことが示される。

さて、Y国人、イーダビー人ともに、調教の目的は「人間脱却」とされ、「少しでも人間的なものが顔を出したら容赦なく罰する」と語られる。「潰滅の前夜」では、家畜化は刑罰として課され、胎内巡りに相当する地下道の通過を経て、女たちは新たに家畜として生まれ変わったとされる。しかし「魔教圏No.8」



ではこの設定は変更され、彼女たちは「生れついて以来の家畜」だが、信徒の負担を軽くするため、黒天使が「体が成育するまで、放牧」しておいたものとされる。このため、「潰滅の前夜」と同様に描かれる胎内巡りでも、より浄化に重きが置かれ、人間社会で身についた人間らしさを洗い流すことが企図されている<sup>19</sup>。

生来の家畜であることに加えて、彼女たちには罪もある。家畜であるにもかかわらず、美しい顔、素晴らしい肉体をもち、あまりにも豊かな生活を送っていたことである。その生活ぶりは、黒天使の信徒よりもはるかに豊かな生活であるとされる。家畜化の道程で彼女たちが被る苦痛は、必要な受苦であると同時に贖罪を兼ねている。

女たちは「捕獲」されると、鼻輪を装着させられ、口と腕を封じられる。舌を口腔内に縫い留めるか、奥歯に穴を穿ち通したバナ式の鉄棒で舌を押さえるなどして、人間の言葉が封じられる。両腕は後ろ手で拘束され、それが基本的スタイルとなる。この拘束の目的は、脱走防止等、対象の行動を制限するためではなく、人間の身体を家畜の身体へと変化させることである。

機能を禁じられている手や足。機能の極限迄動作させられている腿や背。置かるべき首や手足の位置が、意外な場所<sup>20</sup>で封じこめられると、正に人間の肉体ではなく、新しく造りだされた、家畜の肉体として写ってくる。

以上は「潰滅の前夜」の描写であるが、「魔教圏No.8」でも

同じことが企図されている。身体の機能を強制的に別のものに位置づけなおすとき、その身体は必然的に別種の、この場合は家畜の身体として機能し始める。さらに、女たちの調教師は、家畜である彼女たちが生まれ持った正しいあり方<sup>21</sup>として、意志は鳴き声で伝えること、指よりも口を使うことを徹底的に強制するが、その理由は以下のように説明される。

言葉が云えれば、直ぐ不満を訴え、不平を吐き、胡麻かしたり、嘘をついたりする。肉体と云うものは、動けば汗をかく呼吸が速くなる。喘えぐ。限度迄来れば気を失うだろう。この方が正しい意思表示だと私は思う（中略）手が使えらるとつまらないことをする。引掻いたり、殴ったりな<sup>22</sup>。

人間の言葉は信用ならず、彼らは言葉が話せることによって、不平不満を訴え、嘘をつく。手を自由にすれば他者に危害を加える。イータビー人はこのように、人間らしい振る舞いのごとく悪しきものとして否定していく。人間とは、虚飾と嘘にまみれた悪しき存在であり、だからこそ人間から脱却せねばならないのである。身体の新しい機能をマスターすることは、非常な苦痛を伴うが、その先にある家畜の生は、しばしば正直でよきものだと想定されている。

苦痛はもちろん女たちが自ら取る行動も激変させる。どんなことをしてもこの苦痛から逃れたいという「獣の本能」が浮上することで、いかに屈辱的なことでも厭わず行なうようになる。

例えば、ラジオ局に努めていた「才媛」美加子は、極限まで

水分を制限された結果、嫌い抜いた男の足元に自発的に額を擦り付け、足の甲に口づけして水を懇願するようになる。願いが通じ、「男の汚れた靴下を口の中で洗うこと」を許され、美加子は靴下に飛びつく。

美加子は我を忘れて汚布を嘔みしめると、ちゅうちゅうとジュースを吸るように靴下の垢水を吸った。(中略) 慈悲で再度濡らして貰った靴下を、美加子はまるでチューインガムを噛むように、口中に納めたり、口端にはみ出したりさせながら丁寧に揉みほぐした。／唇から顎に、薄黒く汚れた涎水が滴り零れる。恐らく、口腔は垢の臭気やぎとぎとした汗脂のねばりが拡がっているであろうに、家畜は美味そうに眼を細め、与えられた水気を味っていた。<sup>22)</sup>

汗脂が染み込んだ靴下を洗った汚水を喜んで味わう美加子を、イーダビー人は「どうです？家畜の本性が出てきましたぜ」（一四九）と評する。このように「魔教團No.8」においては、極限状態において現れた姿は彼女たちの真の姿なのであり、その際に彼女たちが「人間のプライド」を放棄できることこそが、彼女たちが人間ではなく実は家畜であったことの証拠とされるのである。

僅かではあるが、土路は作中で、苦痛に屈しなかった女の存在を匂わしている。このような女達は、イーダビー人の価値観では、悪しき人間性に染まった不良畜であり、「処分」される。僅かとはいえそのような存在が存在している以上、彼女らと美

加子の違いは存在することになる。美加子の行為は、美加子が自ら選んだことであり、それは彼女が動物であるから行い得たとされるのである。<sup>23)</sup>

動物的な行動とは、しばしば容赦ない他者への殺戮や攻撃の比喩として用いられるが、ここでは逆である。人間こそが、水爆を創り、邪悪な戦争を始めた。家畜の本性とは、ここまで見てきたように、自らの生存のため懸命になることである。これは決して悪しき事ではない。家畜になることは、邪な争いを繰り返す人間から降り、ただ懸命に苦しみの多い生を生きることである。

この家畜の生は、主体性を放棄して、生存のみを目的とすることとも異なる。身体の人間の機能を家畜の機能に上書きすると同様に、人間としての主体性もまた、家畜としての主体性、「獣のこすからさに置き替え」ていくことが目指される。<sup>24)</sup> 重要なことは、土路はこのような家畜への転身を、文字通りの人間からの脱却、真の動物への転身として描いていることである。

「魔教團No.8」における「鼠捕り競技」を参照したい。この競技の目的は、第一に「敏捷性のテスト」、第二に「口の使用方法を覚えさせる訓練」である。家畜たちは、直径5メートルほどの穴にそれぞれ一匹ずつ入れられ、穴に放たれた鼠をすべて口で捕まえるように命じられる。制限時間があり、完遂できなかつた家畜には電気鞭による懲罰が加えられ、完遂するまで何度でも繰り返される。

鼠を口で捕まえることだけでも人間にとってはかなり難題であるが、加えて女たちは後ろ手に拘束されている。そのため

彼女たちはざらざらしたコンクリートの床に顔をぶつけ、膝はあざだらけになる。しかし驚くべきことに、「鼠捕り」は懲罰としての無理難題ではなく、あくまで達成可能な訓練として実施されている。完遂するまで繰り返し行われるからには、家畜たちはいずれ、後ろ手のまま、猫のように敏捷に鼠を口で捕まえられるようになるということである。少なくともそのように観念されている。調教は虐待の建前ではないのである。

同様の展開は他にもある。「ポケ」と名付けられた路子は、担当の調教師イレから、汚れた靴下の中から、臭いのみを頼りに自分の飼主の靴下を選び出すよう命じられ、それをやり遂げる。

でかしたぞ！／助教士は胸裡で叫んだ。そして、この家畜に、こよない愛着を覚えた。(中略)イレは躪って、ポケの目隠しを取ってやりながら、馬を愛するように柔かい臆から頬を軽く叩きながら撫でた。／路子の胸にも、ざわめきが走る。／乱暴に、畜生らしく愛されていることもそれほど気にならなく、己れの嗅覚の確かさを誇りたいような気持でさえあった。<sup>(25)</sup>

イレは、路子が優れた嗅覚を持っていることを大いに喜ぶ。この訓練があくまで路子の人間性を蹂躪するためのものであるならば、この反応はありえないはずだ。ここでは、社長令嬢であった路子が、犬のように飼主の臭いをかぎ分けられるようになること、そのような真の家畜化が、路子、調教師双方に真剣に望まれている。

このほか、家畜は決して衣服を与えられないが、畜舎には暖房がなく、冬が訪れたとき、人間の身体のままではただ生存することすら危うくなることが示される。調教師たちは、衣服により肌を甘やかしていたからだとし、真に家畜になりさえすれば冬を越えられると当たり前のように語る。

「壊滅の前夜」シリーズの主役、伶子は、物語の終わりごろ、調教がほぼ完了した家畜・「ペロ」として登場する。ペロはこの際に、声の高低・アクセントだけを用いる「獣語」で、他の家畜と意思疎通ができるまでになっている。そして、二頭立ての「馬車」の馬となった時、もう一匹の馬が最愛の妹・多穂子であることに気づき、猛然と暴れですが、その際、彼女は本物の暴れ馬さながらに、鞭の嵐をもとめせず駈者を圧倒し、馬車の轆なぐさにヒビを入れる。伶子の暴走の理由は、妹までもが家畜の境遇に至ったことへの衝撃であり、それ自体は人間的な動機であるわけだが、その時彼女は「ぐわあお！」という「動物的喚声」を上げながら、人間の女には到底不可能な力を発揮するのである。飼主の鞭を必死で避けようと、ありとあらゆる努力をしていた弱い女の姿はもはやそこにはない。現実にはあり得ないことだが、土路作品で家畜化される女たちはみなこのように、家畜への真の転身を遂げると観念されているのである。

人間は責められれば萎れます。そして、毎日連続して責められれば、みるみる衰弱して了ることでしょう。併し、私にはヒロインを責められても責められても瑞々(26)さを保つ、美しい肉体として描きました。

土路は、家畜の肉体を、何度責められても萎れない、いわば何度でもよみがえる美しい肉体として意図的に描いたという。美しい肉体とは、人間の女性としての美しさというより、ペロとなった俗子の身体が示すような、家畜としての強さ・美しさでもあると考えるべきだろう。家畜達は、適正な肉付きになるまで運動させられ、裸のまま冬を超えていくことで、鞭をものともしない強い肌を得る。そして、動物並みの嗅覚と猫のような敏捷性を持ち、人間の女性のそれとは別の、家畜としての美しさを身につける。恐ろしい苦痛の果ての、そのような転身を、土路は描き出そうとしているのである。

## 六 家畜の生という救済

土路はサディストを自称しており、一般的に考えれば、Y国人やイダービー人に自らを置き換えてこの小説を書き、読んだと考えられる。しかし、Y国人はともかく、人類の正当な裁定者であるイダービー人に、自らを投影できるものだろうか。土路は、わずかではあるが作中に男の家畜を登場させており、自らの分身を家畜として登場させることも可能であったはずである。「魔教圈No.8」では、路子の弟、正哉が家畜化される展開が計画されており、本格的に男の家畜が描かれた可能性があるが、これは果たされなかった。「魔教圈No.8」は、絶賛を受け、読者の関心が最高潮に達しようとするところで、物語途中のまま突然作者により打ち切られる。

土路が自らの分身を家畜として描き出さないことは、結局彼が女性蔑視者であったということなのかもしれない。土路の家畜化小説は、女性が男性に「調教」され、男性に都合よく「正直」になる物語とも解し得るからだ<sup>23</sup>。しかしながら、この解釈は、家畜化を性奴隷化程度にとらえる際にはふさわしくとも、切実に、土路が描いた意味での家畜化を欲望する際にはそぐわない。女性を貶めるためだけに、ここまで手の込んだ舞台設定は不要なはずである。

この点を考えるため、作中に登場する死者について検討したい。「魔教圈No.8」には、誘拐された女の戦死した兄の亡霊が地獄から現れ、自分は信じる神を間違えたと訴え、家畜になることをすすめるシーンがある。

「志津子！僕は今、十大地獄をさ迷っている、いつ果てるもしれぬ苦しみだ！／兄はほろほろと涙を零して云った。(中略)「黒天使様の御教えは絶対だ。僕は帰依しなかったばかりに、この永劫の苦難を受けねばならない(中略)お前は幸せ者だ。(中略)黒天使様に衆畜として仕えるのだ。それがお前を現世、来世ともに幸せにしてくれる。い、か、家畜になるのだ。」

志津子の兄は、戦死したにもかかわらず英霊とならず、地獄にいと語られる。彼が地獄に落ちたのは、黒天使に帰依しなかったためであり、それは言い換えれば、天皇を信じたためである。つまり兄の罪とは、戦争で人間を殺害した罪であると想

像することができる。そしてこの兄は妹に、イーダビー人の仰ぐ黒天使を信じていれば、お前は現世でも来世でも幸福になれると、家畜の生こそが救済だと説くのである。

この挿話からは、土路が家畜の生を選ぶことすらできなかった死者に目を向けていることが読み取れる。とするならば、「魔教園」における作者の立ち位置とは、水爆で殺され絶滅する男性側であると考えられることもできる。「ヤブー」も全く同じ構造であり、家畜の生は、それすら選ぶことができず死んだ多くの死者の屍を越えた先に設定されている(注3拙稿参照)。家畜化小説のすべてがそうであるわけではないが、少なくとも土路と沼が想定する家畜の生は、人間として死ぬことを回避した先の唯一の生として設定されているのである。

さて、沼によれば、家畜は人間の種類であった。沼が史実を多く参照したように、家畜に割り当てられ、その生を生きる人間が現に存在することは、古今東西、明らかなことである。土路が旧植民地出身者である可能性を踏まえれば、土路はそのような生を現に経験したかもしれない。沼や土路にとって、家畜の生もまた他ならぬ人間の生であることはおそらく明らかなのである。例えば土路は、そんな生を生きた過去のある者を、支配者側の人間として登場させるが、彼女たちは、伶子や路子が無邪気に想定する「人間の尊厳」が、現に家畜の生を生きる人間にとつていかに傲慢で暴力的なものかをあらわにしていく。

言い換えれば、土路の作品は、家畜の生を生きる人間を、引き上げようとするのではなく、あつてはならない存在として否定するのではなく、そんな生を懸命に生きようとする者のみを、

潰滅の後も生き延びさせようとする作品だということが出来る。しかも、家畜となった女たちは、ただ長く苦しみ死んでいくのではなく、苦しみに耐え得る身体を獲得し、今後を生き延びていくと観念されている。そのような生、転身があるとすれば、それは確かに救済であり、希望だと言い得るだろう。そのような未来を夢想することに土路は熱中した。その欲望は、ビキニ事件を経験し、その後の核時代を生きる人々にとって、たしかにリアリティを持ち、同じ夢を見、描く人々を多く生み出したのである。

#### 【付記】

- ・ 本稿は、科研費21K17987、およびサントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」の助成を受けている。
- ・ 本稿は、拙稿「家畜の生に賭けられたもの」『現代思想』(二〇二二年七月)、同「歴史のなかの「S M」小説」(Roca BDSM Magazine)二、二〇二二年(二月)において言及した「家畜の生」というテーマについて、発展的に論じたものである。
- ・ 引用資料のうち、『奇譚クラブ』からの資料は出典を省略し、年号・頁数のみを記した。／は改行を示す。

#### 注

- (1) サディズム・マゾヒズム・フェティシズム、同性愛等、当時周縁的とされたセクシュアリティの当事者を自認する人々の読者投稿誌(一九四七年一月〜一九七五年三月)。
- (2) 沼正三の正体については、拙稿「沼正三・倉田卓次・天



野哲夫・『家畜人ヤプー』騒動解説』(『立命館文学』六八二号、二〇二三年三月)を参照のこと。「家畜人ヤプー」を執筆した沼正三は倉田と断定してよい。

(3) 拙稿「マゾヒズムと戦後のナシヨナリズム 沼正三「家畜人ヤプー」をめぐって」(坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、二〇一九年一〇月)にて、新たな解釈を試みている。  
 (4) 本来、サディズムもマゾヒズムも男女双方に使用可能な概念であるが、当時の『奇譚クラブ』では、女性が凌辱される小説をサディズム小説、男性が凌辱される小説をマゾヒズム小説と呼ぶことが一般的であった。

(5) 土路が『奇譚クラブ』に公開した個人情報をもそのまま記せば、文筆にかかわる職業ではなく、資産家でもない。エッセイに獣医師雑誌や酪農雑誌を引用していることから、これらに関連する職業の可能性がある。引用の雑誌記事は北海道に関するものであり(北見市・網走市)、北海道出身の登場人物もいることから、北海道は彼の所在地の候補である。なお土路は、一九五七年七月号掲載の「通信」で、東京都新宿区在住の土路ファン・甲斐仁参に「近々、仕事の関係で貴宅の近くに転居することになるかもしれませんので、その節はよろしく」と述べている(一四三)。

(6) 人種概念は既に生物学上否定されて久しいが(C・ローリング・ブレイス、瀬口典子訳「人種」は生物学的に有効な概念ではない)(竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』人文書院、二〇〇五年二月)、本稿では歴史的用法として『奇譚クラブ』に見える表現をそのまま用いている。

(7) 『奇譚クラブ』の編集者・須磨利之が久保書店に移籍し、一九五六年一〇月に創刊した雑誌『奇譚クラブ』よりも商業色が強く、読者通信欄はわずかで投稿作家も少ない。

(8) 沼正三「家畜化小説の登場を喜ぶ」一九五六年九月号、四四―四五。

(9) チャールズ・パターソン著、戸田清訳『永遠の絶滅収容所 動物虐待とホロコースト』(緑風出版、二〇〇七年五月、原著二〇〇二年一月)。

(10) 村上克尚『動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理』(新曜社、二〇一七年九月)。

(11) 現在は「わが闘争」の邦題が一般的であるが、沼は石川準十郎訳『マインカンフ研究1』(国際日本協会、一九四一年)を参照しているためこちらを用いる。「アリアン族」などの語も石川本に依った。

(12) 「あるマゾヒストの手帖から」、一九五五年一月号。

(13) 丸浜江里子『原水禁署名運動の誕生』(凱風社、二〇一一年五月)。

(14) 竹峰誠一郎『マーシャル諸島 終わりになき核被害を生きる』(新泉社、二〇一五年二月)。

(15) 沼正三『ある夢想家の手帖から』(都市出版社、一九七〇年一二月等)を参照。

(16) 家畜の生か、人間としての死か、という選択の提示は、「家畜人ヤプー」にもみられ、「潰滅の前夜」の影響と考えられる。「ヤプー」もまた、核戦争による地球滅亡を前提とし、宇宙に進出して生き延びた白人の家畜として生きるか、人

- 間として地球に留まって死ぬかという選択を間接的に主人公・リンに迫る。そしてリンは、家畜の生を自ら選び取る。
- (17) W・B・シーブルック著、斎藤大助訳『アラビア奥地行』(大和書店、一九四三年一月)。
- (18) その理由の一つとして、直接的な強姦描写は、当時の出版状況的に不可能であった、という事情も考慮すべきである。しかし、土路と入れ替わりに『奇譚クラブ』に登場する団鬼六の作品には、具体的に描写されずとも展開上強姦が想定されており、文章が省略されていても、読者が想像でシーンを補える。土路作品にそのような余白はない。また、動物に服は必要ないとして、女たちは全裸で過ごすため、読者がこれを性的凌辱ととらえ、エロス化することは可能である。しかしそれはあくまで作品を読む側の態度であり、作中のイーダビー人は一切エロス化を行わない。なお、このように、作中での脱エロス化は本作がボルノ小説であることと矛盾しない。
- (19) ヤブーもまた、人間とより二つであるが実は知性猿猴という動物だったと白人に判断され家畜化される。
- (20) 「潰滅の前夜」、一九五六年八月号、一一三。
- (21) 「潰滅の前夜」、一九五六年七月号、一二〇。
- (22) 「魔教圏No.8」、一九五八年九月号、一五一。
- (23) 女たちが自殺をしない理由は以下のように説明される。「砂漠の水を求めて彷徨している者が、果して己が手で己の首を縊るだろうか。彼は意識のかすむ瞬間迄、水を求めぬはずっているに違いない。」(「魔教圏No.8」、一九五九年一月号、一五五)。
- (24) 「魔教圏No.8」、一九五八年九月号、一五二。
- (25) 「魔教圏No.8」、一九五九年四月号、一三五―一三六。
- (26) 土路草「無題(読者通信)」一九五七年一〇月号、一七二。
- (27) 土路は支配者側にも多く女性を含めている。しかし彼女たちの位置づけは、レズビアンが性的対象として消費されてきた歴史の範囲を出るものではない。
- (28) 「魔教圏No.8」、一九五八年七月号、一五三。